

東京講演会

皆様おはようございます。この場にお招きくださり大変嬉しく思います。フィレンツェからやって参りました。わたしは1982年よりキャンバス画、板絵、彩色木彫の修復に携わっております。自分の経験を通じ、私にとって魅力的な修復の世界が、皆様方にも身近なものになれば幸いです。

私は、芸術や古いものにとっても興味がありました。文科系高校(liceo classico)を卒業し、医学部に入学したにもかかわらず、修復を勉強し始めました。そして修復に非常に情熱を感じ、人の病を治療するよりも、美術作品を治す道を進みたいと思うようになりました。

かつて、この修復のような仕事を学びたいひとは、職人の工房に入るしかありませんでした。また、その教育は、とても経験主義的なものでした。独特の技術は、秘密事項として受け継がれ、仕事全般は、錬金術を思わせるようなものでした。

それは技法とか、真の修復士育成という概念にはほど遠い状態でした。修復家はほとんどアーティストのように振る舞い続け、工房内で弟子たちは自分の能力で理解できる分だけを習得し、受け継いで行きました。そこで、修復家という専門家のあるべき姿、その概念を形成することが必要でしたし、それが緊急になされるための明確な「理由」が待たれました。

フィレンツェにおける修復を語るならば、転換期となった出来事を語らずにはいられません。事実、そのような緊急事態が起こったのです。それは遠く1966年にフィレンツェを襲った大洪水で、軽油、ガソリン、汚水が混じった大水が人々や物を覆いました。

この時期以前に、すでに北ヨーロッパやアメリカでは最前線の研究者たちが活動していたのですが、我が国で修復は、マテリアルや方法など一切検証されずに、伝統的な秘密事項によって継続されていました。

しかし、この悲惨な出来事が起こったとき、フィレンツェは、まず深く傷を負いましたが、すぐさま、大きな愛による援助の手が差しべられました。水の猛威によって損害を受

けた美術品は、全人類の遺産だったのです。そして・・・世界中から大勢の人が無償で救援に駆けつけてくれました。

国立貴石研究所の修復工房では、一挙に様々な国の言語が話されていました。世界中から専門家たちが一堂に集まっていたからです。

「泥の天使」と呼ばれた人たちがまさしく突如として天使のように現われ、公の報償などを受ける事もなくどこにも消え去りました。フィレンツェという街への愛が、彼らを動かすバネとなったのです。

被害を受けた何千点もの美術品、絵画や彫刻、フレスコ画や建築物を修復するため、フィレンツェの町全体が、巨大な修復工房と化しました。そして何百人もの人々がこの作業に携わりました。また世界中の一流の美術館が、選りすぐりの修復家たちを派遣してくれました。そうした修復家たちと、フィレンツェの美術専門家、美術史家とがいつしよになり、質、量いずれもかつてないレベルの修復チームが編成されました。

こうした'70年代の大きな経験こそが、フィレンツェにある国立の修復研究所、「貴石研究所」の作業レベルの飛躍的向上を決定づけ、また修復家養成のための私立学校設立を促すことになったのです。

私が講師を務める、フィレンツェのパラッツォ・スピネッリ修復芸術学院(東京のランビエンテ修復美術学院と提携しています)は、1976年9月、フランチェスコ・アモデイによりスタートしました。当初の2年間は木製作品の修復コースのみが開かれていましたが、78年3月に「修復芸術学院」として正式に設立されました。そしてわずかな期間に世界的な成功を収めました。以後現在までの間に、6000人余りの学生を育成し、「芸術と修復の都」フィレンツェのイメージを国際的に定着させるのに寄与してきました。

話をもとに戻しますが、私がこの学校に生徒として入学した1980年は、修復の世界で大きな盛り上がりを見せた時期で、やっとの事で修復に科学的な手法が導入され、フィレンツェ大洪水に始まった、世界の修復家同士の盛んな交流が実を結びはじめた時期であったように思います。

実際この街では、修復家は、別の修復家の機密事項であった技術は知らなかったわけですが、世界中の町から専門家がフィレンツェに集結したことによって、現在でも通用するこの「交流」がはじまったのです。それはすなわち、技術交換、研究、チームで作業する方法です。

昔、修復家は、事実上「画家」でした。現在では、むしろ優れた「技術者」としての能力が要求されている事は明白で、修復を成し遂げるだけの必要不可欠な知識をもって、修復を必要とする作品に対し十分配慮できなければなりません。

ですから、この種の教育は学校以外でなされる事は考えられません。

このように、私は学生であった時から、現在講師として、この学校がもつシステムに共感しています。これは長年の経験を通じて、世界的なものとなりました。

修復家の教育の為には、工房内での作業つまり保存や美観の修復作業の他に、基礎を形成する為の理論の教科が必要になります。作品の形態を再構築する技(わざ)を習得する訓練となることから、デッサンを学ぶ事は大変意味のある事です。

同様に、応用の基礎となる化学の知識、作品を構成している材料の知識、絵画の表面のクリーニングを行なう際の生物学的知識や各種溶剤の知識が必要になるわけです。

まあ、そのように、効果的な修復を行なうには、作品1点、1点にかなった修復方法を模索しながら、作品に近づく事の出来る能力を、教育の現場では養って行く必要があるのです。

ここで皆さんに、キャンバス作品の修復の流れの一例を示した、一連の画像をお目にかけてみたいと存じます。無論、これは総合的な唯一の修復方法ではなく、一例としてご覧ください。

修復の分野で、ここ数年、フィレンツェ-東京間で行なわれている活動により、ランビエンテ修復芸術学院で学んだ多くの日本人学生が、フィレンツェのパラッツォ・スピネッリを卒業しています。これにより、両方の教育機関に恩恵をもたらすことができました。それは、目的を同じくした2つの文化が出会うときに起こる現象に似ています。そして今回は、それが文化財を護る専門家たちの育成であったのです。